笛吹高校図書館

図書館通信　vol. 5

こんにちは♪ あっという間にＧＷが終わってしまいましたね（泣）。ＧＷが終わったら、いよいよ高校総体です！ 体育会系はＧＷなんて関係なかったかな？ みんないままで取り組んでいたことの成果が出せるようにがんばってください！ そして、ここぞというところで結果を出せるひとになりましょう！ ベストを尽くしてください！ 応援しています。では、いつもどおりの図書館通信で、みなさんにエールを。

☆『東京タワー』　江國香織

「恋はするものじゃなく、落ちるものだ」。いや、面白い。恋ってこういうものだと見事に描きだし、かつて映画化もされた江國さんの名作が、永瀬廉＆松田元太W主演でＴＶドラマ化されるので改めて読みなおしてみたところ、これが 2001 年に刊行された本ですがいま読んでもこんなに面白い本はない！というくらい面白かったので、冒頭に☆つきで紹介します。彼ら二人が、年上の女性との恋に溺れていく大学生を演じます。江國さんはあとがきで、「若い男の子たちに、おそらくは不覚にも恋をした、二人のあまり若くない女たち ── 詩史（しふみ）と喜美子（きみこ） ── には、敬意と同情を禁じ得ません。恋の前で、人はたぶん勇敢にならざるを得ない。読みながら、あらまあ、と思っていただけたら嬉しいです」と書いていますが、いやいや、二人の若い男の子たちにこそ同情したいです。高校２年で母親の友人として詩史と出会った透は、たとえば詩史さんと一緒に音楽を聴くと、「身体（からだ）じゅう音楽で満ちてしまい、他のことは何一つ考えられなくなる」。「でもそれは、そのピアニストが天才だからではなくて、詩史さんと一緒に聴くからだ。詩史さんに聴かされるからと言ってもいい」と感じ、「自分は音楽になどさして興味はないのに、自分の身体が音楽をひどく欲していた」と感じてしまうのです。重症ですね。そして、彼女の読んだ本をすべて読んでしまいたくまでなってしまうのです。「詩史は、小さくて美しい部屋のようだ、と透はときどき考える。その部屋は居心地がよすぎて、自分はそこからでられないのだ、と」。同じ大学生の本命の彼女がいるのに、「悪魔のように蠱惑的」なずっと年上の喜美子とつきあっている耕二も、重いと思いいつか捨てようと思っていた彼女と離れられなくなっていくのです。恋って、「どんどん度を失っていくので、自分で自分が怖い」ものなんですよね！

『川のある街』　江國香織

そして、江國さんの最新作にして到達点！ 東京・赤羽、富山、オランダの川のある３つの町を舞台にした中編集です。とりたてて大きなドラマが起きるわけでもなく、そこで暮らす人々の「生」が描かれます。一つ目の作品の主人公は、小学３年生の少女・望子（もちこ）。望子の両親は離婚していて、久しぶりに会った元父親と別れて歩き出す瞬間が苦手だと思っている。見えなくなるまで見送られるときに、ふりむいた方がいいのか（そうだとしたら何度くらいか、手はふるべきか、どんな顔でか）わからなくなってしまうからだ。二つ目も、小学生でカエルの好きな少女・真凜。母親が出産のために入院していて、ひとりでなわとびをしていた彼女は、母親の弟の彼女で両親に挨拶をしようとこの街に来た麻美（あさみ）と仲よくなります。そして、この作品では、真凜たちの周りにいるカラスたち（！）の「感情」まで巧みに描写されます。最後の一編は、同性のパートナーとともに暮らすため、オランダに移住してきたが、十年以上も前に彼女を喪い、現在は認知症が進行しつつある老女・芙美子が主人公です。自分と遠く離れた存在が見ている世界を体験できます。

『グリフィスの傷』　千早 茜

「からだは 痛みを忘れない ── たとえ肌がなめらかさを取り戻そうとも」。直木賞受賞作**『しろがねの葉』**で新境地を切り開いた千早さんの最新作は、「傷」をテーマにした物語を 10 収録した短編集。傷のお話ばかりずらりと並べても悪趣味にならないのは、千早さんの傷への愛着ゆえ。タイトルの「グリフィスの傷」とは、ガラスの表面についた無数の傷のこと。一見つるつるに見えるガラスにも実は目に見えない傷がたくさんついていて、ガラスが割れるのはその傷に力が加えられるからだそうです。表題作に登場する、中傷に対してリストカットしては写真に撮りＳＮＳにＵＰしていた元アイドルは、幼少のころ、母親のガラスのマリア像が大好きで、母のいないときにこっそり持ち出して遊んでいたら、ちょっとしたショックで粉々になってしまいます。「みんな、皮膚の下に流れている赤を忘れて暮らしている」。冒頭の「竜舌蘭」では、主人公は高２のときにこれといった理由もないのに突然、クラス全員から無視されるようになりますが、ある朝サボテンや観葉植物をたくさん育てている家の庭の竜舌蘭の棘で太ももに大きく傷を作り、血まみれで教室に入ったところみなに注目されます。「あれだけ徹底して無視していたくせに、こんな血くらいで私を見るのか。こんな、ほとんど痛みともいえない痛みで」。新しい傷を残します。

『こまどりたちが歌うなら』　寺地はるな

「やりたかった仕事、なりたかった自分。たとえ辿り着けなくても ── わたしたちは、ここにいる」。こまどりを模した、つぶ餡がごく薄い皮につつまれた饅頭、「こまどりのうた」。それが看板商品の和菓子工場をもち、直営の和菓子屋「こまどり庵」も運営している小さな製菓会社「吉成製菓」。お菓子に興味がなく老人ホームで働いていたが、社長である父親が心臓を悪くし、その後継者となった親戚の伸吾の誘いで、茉子は吉成製菓に再就職をした。茉子にとって、頼りないと評判の新社長・伸吾のイメージは、親戚の集まりで男の子が寿司のネタだけを食べてしまったのをかばってシャリだけをいくつもほおばっていた中学のころのままだ。吉成製菓は、「会社のルール」が幅をきかせている典型的な旧態依然の昭和の会社だった。残業をするときは、定時でタイムカードを押してからにすること。会社の最古参で人一倍仕事をこなしていながら、パートに甘んじている亀田。パワハラ系上司の江島と怒られてばかりいる部下の玉置。茉子は、仕事に慣れていく一方で、おかしなことを何とかしようとして奮闘する。「伸吾くん、知ってる？ こまどりってさ、ものすごく大きな声で鳴くらしいよ」「なんのために？」「わたしが思うに、大きい声を出さないとそこにいないことにされるから、や」「黙ってたら、みんな無視するやん。無視していいってことにされてしまうやんか。いないことにしていいってなる。だから、こまどりは鳴くんや。ううん、叫んでいるんや。ここにいるって」。茉子には、前の会社で同僚がいじめに遭い入院し、見舞いに行ったら「見て見ぬふりしとったくせに」とヨーグルトを投げつけられた過去があった…。

『ようこそ、ヒュナム洞書店へ』　ファン・ボルム

「この小説にはわたしの好きなものが詰まっています。本、町の本屋さん、本で読んだ良いフレーズ、思考、省察、思いやりと親切、互いの距離感を保てる人同士の友情とゆるやかな連帯、成長、率直で深みのある対話、そして、いい人たち」（著者）。本屋大賞翻訳部門第１位！ ソウル市内にある小さな本屋さんが舞台の小説。新米女性書店店主と店に集う人々の、本とささやかな毎日を描きます。ヒュナム洞の住宅街に小さな書店がオープンした。だが店主であるヨンジュは、ほとんど何もしようとせず、力なく座ってぼんやりし、時には涙までこぼしていた。そうせざるをえない、理由があったのだ。そんな書店であっても、やがて人が訪れるようになり、ヨンジュはバリスタを雇って…。書店という、時間が穏やかにたゆたう空間の物語。

『ユニクロ』　杉本貴司

「同じことをしていてはダメだ」。ユニクロの出発点は、柳井（やない）正（ただし）氏が親から引き継いだ地方のさびれた商店街の紳士服店でした。「本屋みたいな、レコードショップみたいな、在庫ドッサリ、服屋さん。どうしてなかったんだろうね」。いけ好かない店員がべったりとくっついて接客するＤＣブランド全盛の時代に、書店やレコード店のように商品が置かれているだけのお店。「いつでも誰でも好きな服を選べる安いカジュアルウェアの巨大な倉庫」というコンセプト。朝６時に開店し、あんパンと牛乳を配ってオープンするや、客が押し寄せてパニック状態に。このコンセプトは繁華街よりも郊外の方が受けいられるのではと、郊外に出店しては大当たり。やがて「売れそうな服」をメーカーから大量に仕入れて安く売るビジネスモデルから、「売れる服」を自ら仕掛けてつくっていくように。読書家である柳井氏はある本から「現実の延長線上にゴールを置いてはいけない」ことを学び、ユニクロの終わりを「世界一」に定めたのでした。

『ニッポンはじめて物語 世界初・日本初の
ヒット商品を生んだ開発者の熱き魂』　北辻利寿

胃カメラ、ウィルキンソン、お子様ランチ、オセロ、カーナビ、コンタクトレンズ、カッターナイフ、カニカマ、乾電池、ごきぶりホイホイ、コロコロ、シャープペンシル、修正テープ、食品サンプル、使い捨てカイロ、点字ブロック、ドリア、ビニール傘、マッサージチェア、レトルトカレー…。みなさんはずらりと並べたこれらのモノの共通点がわかりますか？ そう、すべて日本初、日本の発明品なのです！ それぞれの開発エピソードが添えられていて、面白いです。たとえば、オセロは牛乳瓶のフタを駒に使っていたのが、公式サイズになっているとか（だから、いまでも牛乳瓶のフタを４枚重ねたサイズなのだそう）。カッターナイフは、進駐軍のアメリカ兵がパキパキ割って食べていた板チョコが発明のヒントになったとか。カニカマは人工くらげの失敗作だったとか。日本で発明されたモノばかりでなく、日本が進化させたモノも多数掲載。ドライヤーがただ髪を乾かす道具ではなく、「髪を守り、美しい髪を保ち、地肌も守る」美容家電になっていることなどは、もちろんご存知ですよね？

――ＧＷにはせーやさんは、三日月の小舟に揺られながら、天の河の水音を BGM に、夢を喰べるバクのおなかを枕がわりにして、星の灯りで本を読んでいました♪
美人さんのねこといっしょにね。しあわせ。では、図書館で。